

白金藪

8月号



平成28年8月発行

第66号

白金葭定例句会案内

九月十六日（金）	12:00～15:00	ア工作室兼題・ 蟻螂、秋薊
十月七日（金）	10:30～15:30	吟行句会（駒場公園内近代文学館→句会場（駒場住区センターハー第一会議室））
十月二十一日（金）	12:00～15:00	ア第5兼題・ 栗、行秋
十一月一日（火）	法隆寺拝観（夢殿の救世観音）	
十一月十八日（金）	第三兼題・ 神無月、沢庵漬	

兼題句参考句（9月16日分） **蟻螂、秋薊**

なすことも無く蟻螂の構え居り 内宮に流れ着きけり子蟻螂

新宿は西口で会う疣筆り 蟻螂の汝にはコントラバスが似合う

蟻螂は馬車に逃げられし馭者のさま 蟻螂のひらひら飛べる峠かな

童子仮濡れてゐるなり秋薊 廃屋となりたる湯宿秋薊

富士を背に草屋根のあり富士薊 古墳山のばれば秋の薊かな

秋あざみ振りむけば海きらきらす

中川芳子
大類準一
小林実
中村草田男
大山安太郎
岸本尚毅
高木良多
北吉裕子
瀧春一
糸山和子
野澤 節子
大坪景章

俳窓評論纂

*彩130号は40頁を使って佐藤恵子句集の特集号となつていて。以前同席した里川水章さんが長い紹介文を書かれている。詩から出発したという著者にかこつけて、詩と俳句について教師調の解説をなされ、宏之助さんと同じく、秋元不死男に入門、その後昭和53年に天狼入門、狩の鷹羽狩行にも投句後、天狼遠星作家として新人賞も受賞して活躍されたとある。平成6年の誓子没後は平野ひろし主宰の彩へ同人参加。私が周りから言われるままに、築港に同人参加した年であつた。本誌の先々月取り上げた「藍甕に二度漬けし色濃紫陽花」の句から句集名を「藍甕」にされたとあり、天狼の年譜のような句が紹介されている。誓子先生の一周忌に高幡不動に集つた作家は30人位いたと思うが、追悼句会で、水章さんが忸怩たる思い云々と云われたのを覚えている。最近は「集ふ者五人となりし誓子の忌となつたが、恵子さんや宏之助さんなどはその五人の中に居るのであろう。遠星集作家らしい親しみのある句を抜いて紹介にとどめる。」

三上池万年雪の端浸る
登山道遭難の碑が道しるべ
下山して富士の全姿を目に收む

登山小屋無線アンテナ輪飾す
長病みの母ベッドにて鬼やらふ

吉野山昼見し桜夜も見る

葡萄棚青嶺の青き裾延ばす

山開き早池峰山頂神樂舞ふ

山小屋の雑魚寝窓辺に星満ちて

磯焚火生きる海星投げ込みり

神鏡に黒き一閃つばくらめ

白帝城峨々たる峰に峰雲聳つ

富士登山星は真実天の花

山小屋の屠蘇受く大き薬罐より

メロン食ふ介護の我がみんな食ふ

寝たきりの母も虫干車椅子

双方に勝ち名乗りあぐ泣相撲

居間は兼書斎と客間一葉忌

花御堂枝垂れ桜の樹下に据ゑ

冷房に勝る靈気よ三蹟展

*山尾かづひろさんと俳誌交換のあすか8月号に久里

浜在住の村上チヨ子さんが久里浜の現代を書かれてい

る。夕爾の娘さんがお住まいであるので、関心があつ

た。運輸省の港湾技研があつたり、自衛隊がある街。

*同裏に子規の東京物語32が掲載されてある。かづひ

ろさんの定住文だ。今月号は芭蕉200回忌のことが子規

を通して紹介されてある。いつものことだが、ジャー
ナリストイックに書かれてある。

*孝三さんより「歴路」7月号の一部コピーを頂いた。

同誌は合同句集謹呈の倉橋鐵郎さんの結社誌である。

主宰の向田貴子さんの句は

沙羅咲くやかねてこころに麻耶詣で

ぼうたんや弥勒の思惟をさまたげず

真間の江に汐の香さして初燕

桺咲いて免れ難く古るよはい

などやゝ主観的であるが心が見えてこれでいいので
はと思いました。倉橋鐵郎さんの「真間暮春」は

拾ひ読む万葉の歌碑真間暮春

水なきに「真間の継橋」暮の春

など市川より手児奈堂への参道の風情がおとなしく

読まれていて好感がもてる。

*最近知り合つた我孫子市の加藤さんから「俳諧かる

た」の資料を頂いた。H 24・12・12の日本経済新聞

に横井士郎氏が紹介した。同氏が連句結社の会員の方

と奥さんの知人の画家の協力を得て、連句の俳諧と付

句を切り離してかるたにしたものだ。連句作者は江戸

時代の蕉門蕪村門一茶門それぞれ26編、11編、11編

合計48編からなつてている。発句に付句を選ばれてある。

連句に親しんでもらう便よすがに作られたのだ。

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭頂きました。中の手紙を見ました。十名で予約しました。お弁当（夕食分）適当にお土産に入れます。人数が増えてもなんとかなると思います。当日樂しくなればと思つています。夢殿へ行かれるのですか。すばらしいですね。呉々も御体を御大切にして下さい。

（7・25 小山陽也）

暑中お見舞い申し上げます。梅雨明けと共に厳しい暑さが続いています。白金葭7月号受け取りました。ありがとう。しばらく無音にしています。梅雨明け前には集中豪雨があり、あちこちで土砂崩れがおき通行止めもあつたりで大変でした。災害復旧には時間がかかりそうです。多量の雨のせいと気温の高さで雑草の処理に苦労しています。刈つてもすぐのびてどうにもなりません。朝早くと夕方少しとぼちぼちやつていまます。6月末に年金友の会で三朝温泉と蒜山高原、鳥取砂丘など一泊二日で行つて来ました。皆さん顔見知りばかりで楽しい2日間でした。田植をして間がないと思つてももうそろそろ穂ぐみをしている状況です。毎日元気で農業やゴルフのできることに感謝の毎日です。高志も編集や発行など忙しそうですが、あまり一生懸命にならず、少しあはれをゆつくりと持つて暮らし

て下さい。（中略）まだまだこれから暑さが続きます。敏子さん病み上がりです。お体をいといながらゆつくり楽しむ暮らして下さい。ご健康心よりお祈りもうしあげベンを置きます。我家の車庫納屋癪が巣作り

つばめの子掃除大変巣立ち待つ（7・26 健三）

暑中お見舞い下さいましてありがとうございます。五周年お祝い会開催迄、お忙しかったこと、存じ上げます。少しゆつくりお休み下さい。頂いたルリタマアザミの絵ハガキ涼しいそうで、私も前には是非欲しくて入手、毎年庭に咲いて庭でいましたが、ノコンギクの繁殖にやられ姿を消し残念です。この絵を拝見し日々で嬉しうございました。今日白金葭七月号と小山さんの会のお知らせ頂きました。暑中老人が伺えますかどうか思案しております。ポケモンGO！とか、私などに縁はありませんが、夢中の余りの交通事故も出はじめ怖いことです。おでかけにはお気をつけ下さいませね。

日は長くても水やりなどは、四時半過ぎなければ出来ず、夕食支度の時間がすぐ来てしまってこの頃夕食は七時になり、アツと言う間に十一時、十二時そして明け早く三時に朝刊が来ます。光成様と二人三脚ますますお元気で。光みち様（7・26 瑞子）

暑中お見舞い申し上げます。皆さまお元気ですか。

敏子さんその後少しは良くなられましたか。気になつても何もできなくてすみません。私は年相応で仕方がないかと考へています。高志さんが云つてくれた様に幸福と思い頑張っています。お体大切に。（7.30 幸子）

残暑お見舞い申し上げます。この度は「白金葭」合同句集をお送り下さり誠に有難うございました。その後ご無沙汰ばかりで大変心苦しく存じておりましたが、句集を拝見し、ますますご健勝にてご健吟の様子本当に嬉しく存じました。句集は早速通読・再読させて頂きました。浅学の私などが感想を申し上げるのは僭越と存じますが、句あり、エッセイあり、研究論文ありと極めて内容の濃いすばらしい合同作品集であり、お仲間も一騎当千の素晴らしい方々と想像され只々感銘いたしました。良いのものをお送り下さり心から御礼申し上げます。感謝の印と致しまして特に感動した十句を以下に記載させて頂きます。

蛤汁のとろみ洛中洛外図

麦秋の木馬の眼青く塗る

満月ノ影踏ミシマセウモウ一度

湯たんぽやこの足踏みし山や川

弔句二句

赤マンマ小サキ死出の足袋履ケル
紅を正さる残暑の棺の中

元旦のきのふと同じ顔洗ふ
はたと二駅乗り過ごしたる秋思
胎内に習ひし形月夜眠る

一茶の背兜太が洗ふ大年湯

秋立つとは名ばかり、暑さはこれからが本番と思われます。どうか十分ご自愛の上ご健吟下さい。この度が本当に有難うございました。

平成二十八年八月山の日

倉橋鐵郎

飯田孝三様

追悼・誠にお恥ずかしいものですが、私の傘寿記念として作成した句集を同封いたします。ご照覧賜りますれば大変幸いでございます。

残暑お見舞い申し上げます。昨日は遠方のところ熱い想いを行動に移され人生まつしぐらに突き進んでおられるお姿に接しまして私も負けじと奮い起つ一日でした。目指すは簞玉氏ありですね。祐一氏もこれから出品作りに地獄の毎日が来るとのこと。光成さんのパフォーマンス、兄上のそれ、そして遠くリオの地でがんばっている選手の皆さん、熱いく今夏に遭遇出来ましたことに感謝しつつ元気でがんばってゆこうと思っています。では又。（8.11 加納綾女）

近づいてゆけばひまわり高くなる 石井とし夫句

白金葭読ませてもらいました。又別便で感想を送ります。

(8. 13)

山本百合子

お暑い折りから福山にて逢えたこと何十年振り市内にて尊兄と歓談の機会を作つて頂いたことに感謝しております。楽しい夜をプラプラと老人が歩いたね…。忘れない思い出となりました。ありがとうございます。まだ残暑は当分つづきそうですから、どうぞご自愛のほど祈り上げます。先ずはとりあえず残暑見舞いまで。

瓜もみに飽きてしまつた大暑かな (8. 16 鹿見峯子)

残暑お見舞い申し上げます。写真はがきありがとうございます。久しぶりに先生の顔を見、又いろいろな作品鑑賞できて良かった。色々人と積極的な行動にはちよつと驚きました。二人で食事もできて最高の一日でした。ありがとうございました。まだ暑さが続きそうです。無理せぬように。

(8. 16)

健三より

残暑お見舞い申し上げます。台風は悪さをしませんでした? お伺い申し上げます。先日は早速に素晴らしい記念の写真をお送り下さいましてありがとうございます。一日くを大切に刻んでいきたいと思つております中での今回のイベントでした。感動を思い出を次の生命に繋げてゆきます。お礼まで お元気で。

(8.17)

加納綾女

昨日は大変お世話になりました。心からお礼申し上

げます。上野の近くに居ながら、初端から出遅れ、とんだご迷惑やらご心配をおかけしてしまいました。今更、反省しきりです。お許し下さい。これからも何

卒よろしくお願ひいたします。陽也さんが大変お元気なご様子で何よりでした。今年も大変ご馳走になつた上、お土産をいっぱい頂戴しました。いつも陽也さんと高志とのご交誼にご相伴させていただき、お礼の申し様もありません。ついつい気懶な放談に流れ特集号についての感想に触れず仕舞だったのは残念ですが、次の折りもあるでしよう。ご自愛ご健吟を。

(8. 22)

飯田孝三

先日は本当に楽しかつたですね。光成さんが十月法隆寺へ行かれてから今度は俳人ばかりの会をしましょ。そして少しは俳句の話を聞かせて下さい。皆様から御葉書を頂きましたが返事はしていません。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。それにしても会計は大変でしよう、小規模の会社では奥様が会計をやっているところが多いようです。みちさんを大切にして下さい。

(8. 23)

小山陽也

ハガキ句70報 (8. 16 - 8. 19)

於 梅の花

俳人と我が名呼ばれん涼新
遅く参じて飲む冰水
夏休背筋伸ばして上野かな

敦幸高

風月堂に集ふ八人
極楽鳥の花の館を出て夏帽
初めてのベーゼ不忍の丘に

南瓜の実木の枝よりぶらさがる
蝉なき終り休みも終る

雅 陽 宏 孝 み

又料理メニュー紙の題は きりぎりす山口誓子の白金
葭 平成二八年八月一九日 と書かれてあり、店主の
心遣いが見えていた。俳句が書かれてある箸置きを使
うもてなしもそつうである。

受贈誌（H 28年8月号）

八月は句会を休み熱暑を凌ぐうとしたが、陽也さん
の申し出を受けて、懇談会として上野広小路の梅の花
に集い、雑談をした。先の合同句集の感想会もしてい
ないので、私はそれに当てようと思っていましたが、
座の雰囲気はそんなものはなんのその雑談に終始した。
僅かに芭蕉の話が少し出た。芭蕉はわからない、薄情
だなど大体否定的な話であった。これに触発されて、
今月も私の閑話休題を（2）として書かしめた。右の
連句は風月堂に移動して無理して作ったものです。た
だ宏之助さんのしつらえで、誓子先生の自筆の俳句軸
が床の間に飾られた。句は

一 湾 の

潮 しづもる
きりぎりす

と云うもので、この軸の前に極楽鳥花が活けられ、

袖の花やひそかに参る疣地蔵（彩130号）
(山尾かづひろ吟行ノート H 28)
07・10・8・17
江戸前の鮎の放流山深し
川に立ち五体満足鮎を釣る
縄張りを守り守りて鮎釣られ
二 湾 の

こ だま

お互いひを振り返りけり夏帽子（東京ラブ8月）
黒屏の潜り戸よりの船遊び（リ）
かなぶんの青衣が過ぎるLED（リ）
八月やホース干し出す消防署（リ）
少女らの手足は長し雲の峰（リ）
万世遊 璃子
理佳江 文男

トシのいる場所—宮沢賢治の挽歌群— 武者昭七

一九二二年（大正十一年）十一月の末賢治は二つ違
いの妹トシ（二十一歳）を失つた。「信仰を一つにする
たつたひとりのみちづれ」（「無声慟哭」）と呼んだほど
の最愛の肉親であった。「無声慟哭」「オホツク挽歌」
などの多くの挽歌がそのあと誕生する。「ああ何べん理
知が教えても 私のさびしさはなほらない」（「噴火湾」）
と後年まで賢治は歌う。どこかに隠されているトシの
ありかを尋ねる旅、それを探すことが賢治の生涯の旅
であった。熱にあえぐトシに「雪のふたわん」をさし
だしながら「どうかこれが兜率の天の食に変はつてお
まえとみんなに聖い資糧をもたらすことを願ふ」と
いう賢治（「永別の朝」）。「あいつはどこへ堕ちようと
もう無常道に属している」と叫ぶ賢治（「青森挽歌」）に
まず僕らは出会う。「兜率天」とは弥勒菩薩のいます天
上世界であり、「無上道」とはこの上ない悟りの世界で
ある。トシは仏教的な天上世界に登つたと賢治は確信
する。ヤマトタケルの幽魂が白い鳥となつて飛び去つ
たという伝説はよく知られた伝説だけれど賢治も林の
中で白い鳥となつたトシに出会う。その一節「二四の
大きな白い鳥が 銳くかなしく啼きかはしながら し

めつた朝の日光を飛んでいるそれはわたくしのいもう
とだ 死んだわたくしのいもうとだ 兄が来たのであ
んなにかなしく啼いている（「白い鳥」）。

白鳥伝説はおそらく仏教渡来以前からこの国の風土
に根差した民族的信仰だった。その伝説にトシが重なる。
ここでトシははるかに遠い天上世界ではなく賢治
のすぐそばにいる。柳田国男は祖靈は常にこの国土の
うちにとどまつて子孫の繁栄を見守つていると説いた
（「先祖の話」）。賢治にもそんな民族信仰がやどつてい
るよう思われる。大正十一年夏 北海道旅行の帰り、
雲をかぶつた駒ヶ岳をみて賢治は「そのまづくらな雲
のなかに とし子がかくされているかもしねり」と
思う（「噴火湾」）。賢治は「死とはこの世の現象が異空
間へ移ることだ」と言い、そのさびしいものを死とい
ふのだと言い「わたしの悲しみにいぢけた感情は ど
うしてもどこかに隠されてたとし子をおもふ」とうた
つた。トシは何処にいるのか。トシを探す旅は銀河の
果てまで続くのである。

芭蕉のかるみ以後の閑話休題（2）

光成高志

芭蕉は奥さんが亡くなつて、「数ならぬ身とな思ひそ
玉祭」と詠んでいる。これはないでしよう、薄情だと
いうものである。元禄七年六月に落柿舎で壽貞尼の計

報が来たのですぐ一緒に旅をしていた子の次郎兵衛に手簡を持たせて江戸へ返した。その手簡は左である。

壽貞無仕合もの、まさ・おふう同じく不仕合、とかく難申盡候。好齋老へ別紙可申上候へ共、急便に而此書状一所に御覽被下候様に頼存候。萬事御肝煎御精出しの段々先書にも申来、扱々辱、誠のふしきの縁にて、此御人頼置候も、ケ様に可有端と被存候。何事もく夢まぼろしの世界、一言理くつは無之候。ともかくも能様に御はからひ可被成候。理兵へもうろたへ可申候間、とくと氣をしづめさせ、取乱し不申様に御しめし可被成候。以上

六月八日

桃青 判書

猪兵二様

伊賀上野念佛寺過去帳二日の「松誉壽貞」が江戸の壽貞と同一人と見られるので、その忌日は六月一日となる。芭蕉はその年の七月十五日に第十一回目の帰郷し盆会を當み

(続猿蓑)

家はみな杖に白髪の墓参

尼壽貞が身まかりけると聞きて

數ならぬ身とな思ひそ玉祭

(有磯海)

山家集に「世をいとふ名をだにもさはとどめ置きて数ならぬ身の思出にせん」があるし源氏物語に「数ならぬ三稜や何の筋なれば憂きにしもかく根をとどめけむ」(玉鬘)や紫式部集に「数ならぬ心に身をば任せね

ど身に従ふは心なりけり」など用例はたくさんある。人の数にも入らぬ身だなどと思うでないよ。玉祭には多くの仏たちと同等に祭られているではないかといふ壽貞の追善句。静かに語りかける口調に深いいたわりと悲しみがこもる。壽貞無仕合ものと芭蕉が書かねばならなかつたところにも悲しみがこもつてゐる。俳諧の作品として普遍性を持たせ後世に残したのだ。源氏物語でもそうであるが、歌の実^{まこと}とこの世の実^{まこと}とは一致しないのだ。歌を見れば作者の実人生がわかると思つたら大間違い。歌と実人生には断絶がある。決して連続した世界ではない。芸術作品というものはそういうものだと覚悟して見なければならぬ。芭蕉の俳句が芭蕉の人生を表していると即座に思うのは危険である。西脇順三郎が書いた「芭蕉の精神」(文藝読本松尾芭蕉昭和53年)を読んで改めてそう思つた。桃青こと若き芭蕉は莊子を読んで開眼して自らの学問を発明したのだ。それが正風俳諧である。老子莊子を合わせて老莊思想といふが、その根本思想は、「道」である。これは「物有り渾成^{こんせい}し、天地に先んじて生^{じた}」した状態。つまりまだ天も地も生まれておらず、渾然としてはいるものの何物かがあるような状態です。逍遙遊^{しょうようゆう}篇では、「無何有^{むかう}の郷^{きょう}」とも表現している。「何も有ることなき郷」、何もない、物が現れて

いない、時間も生まれていないし空間も生まれていないと
い廣漠の野ということです。時間が生まれていないと
いうことは、音もないということです。不易流行の不
易のところ、「造化したがひて四時を友とす」の造化で
ある。自然である。

此の道や行く人なしに秋の暮

の道がこれである。無為自然というのも老莊の哲理
である。とにかく儒学が盛んになつた時代に芭蕉はそ
れと全く違う莊子に出会つてこれだと自得したのだ。

野ざらし紀行

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

はなんと薄情など思うのは現代の能天氣である。老
莊の道を知つてゐる芭蕉は云つてみれば聖人である。
聖人は仁せずというのが老子の思想である。猿の声を
聞いて断腸の思いをうたつた詩人たちよ。富士川の急
流の河原で冷たい秋風に吹かれながら泣くこの捨子の
声をなんと聞くか。仁を施さずつまり命を助けること
もせす通りすぎてしまつた。これはおそらく紀行文の
フレイクショーンである。それがこの世の実。俳諧の世界
では、何もせずに通り過ぎるのでだ。既に言わんとする
ことが見えているでしよう。

莊子妻死、惠子弔之、莊子則方箕踞鼓盆而歌。惠子
曰、「與人居長子、老身死、不哭亦足矣、又鼓盆而歌」

不亦甚乎！」莊子曰、「不然。是其始死也、我獨何能無
概然！察其始而本無生、非徒無生也、而本無形、非徒
無形也、而本無氣。雜乎芭勞之間、變而有氣、氣變而
有形、形變而有生、今又變而之死、是相與為春秋冬夏
四時行也。人且偃然寢於巨室、而我噭噭然隨而哭之、
自以為不通乎命、故止也。」これは莊子の妻が死んだ時
惠子が之を弔つた時の話である。

「莊子則ち方^{まさに}箕踞し盆を鼓し而して歌う。惠子曰
はく、人と與ともに居りて子を長ぜしめ、身老ひしめ死
す、哭せざるは亦足れり、又た盆を鼓して歌ふは、亦
甚だしからずや！」莊子曰はく、「然らず。是れ其の始
めて死するや、我獨り何ぞ能く概然なからんや！其の
始めを察するに本より生無く、徒だに生無きのみに非
ずして、本より形無し、徒だに形無きのみに非ずして、
本より氣無し。芭勞^{ばうこう}の間に雜^{まじ}はりて、變^うじて氣
有、氣變^うじて形有り、形變^うじて生有り、今又、變^うじて
死に之くのみ。是れ相^{あい}與ともに春夏秋冬の四時の行
か^うを爲すなり。人且に偃然として巨室に寢ねんとする
に、而も我、噭噭^{きょうきょう}然として、隨ひて之を哭する
は、自ら以て命に通ぜずと爲す。故に止めたるなり。」
と。すると莊子は両足を投げ出して座り、土の瓶を叩
きつつ歌を唄つていた。惠子は「夫婦として共に暮ら
し、子どもを育て老年になつたのである。その相手が

三百六十日 三百六十日

日日醉如泥

李白の婦と爲ると雖も

雖爲李白婦

何ぞ太常の妻に異らん

「一年三百六十日、毎日泥のように酔つ払つてゐる。

李白の嫁になつたといつたつて、これではお前、太常

の妻とかわらないね」泥はドロではなく、南方の海に
いたとされる軟体動物の泥でのこと。海中では自由に
動き回るが、陸地に上るとグツタリしてしまうこと
から、酔つ払いの例え。今日「泥醉」という言葉があ
りますが、あれの語源です。「太常」は、宮中で皇帝の
先祖を祭る神主のことです。後漢時代、周澤という太

常職の男がいました。この周澤がある時病気になり、
廟内で休んでいました。そこへ妻がお見舞いに来ます。
しかし、周澤は怒り狂います。「お前のせいで、神聖な
場が穢れてしまつた。どうしてくれるんだ」「そんな、
私はあなたのために……」「やかましい。」とうとう周澤
は妻を捕えて牢屋に入れてしましました。これじゃあ
奥さんはむくわれません。ひどい話です。李白はこの
故事をふまえ、ユーモアまじりに言つてゐるのです。

いつも酒ばっかり飲んで、家を空けて、すまんな。
また奥さんのほうも、こんな高度なたとえが理解でき
るくらいなので、よほど学問のあつた女性なのでしょ
う。芭蕉は、李白の「内^{つま}に贈る」の詩も踏まえて作り
変えたのだろう。

内贈
李白

う。数ならぬ身とな思ひそ玉祭、物があつて生と死は同一のものである。死はただ本体に戻ることだというのが莊子の説なのだから。歌の実に生きた芭蕉は実際の世の中を生きた芭蕉とは断絶があつて同一ではないと思えばすべてが理解できる。芸術と云うものは皆そういうのではないでしようか。梅原龍三郎の富士山の絵を見て実富士山と思う人はいないでしよう。それと同じです。老莊の道という概念は、どうも現代の宇宙創成の無であると私は考えます。今の物理学は二千年余り前の思想を科学的に追つていて過ぎないのかもしれない。精神は進歩していないうえです。(日28.8.26)

我孫子日記

	7/15 例会
*	7/24 藕糸蓮
	8/9
*2	福山
	8/10 竹工芸展
*3	
	8/12 利根親水公園
*4	8/19 上野

*抜きんでて花弁開く藕糸蓮
そっぽ向く向日葵はなし根戸新田
*猛暑の熱籠る新幹線ホーム

スマホにてハイジのじいちゃんと云はれ

*3 ホテル出て熊蟬の声懐かしき

芸術家一家の真夏よい暮し

千鳥編晩夏と名づけ綾やあり

高志

白金霞8月号(第66号) 平成28年8月発行
編集・発行人 光成高志 (〇四一七一八七一〇六八)
発行所 1119我孫子市南新木2-14-17
270

*4 握手して百寿掌てのひら柔らかし
蓮の実の台うてな乾き天を向く
目高は水面に蝌蚪は水底に
糸とんぼ草の葉先にすぐ止まる

雲の峰田園の中の鉄工所
水戻り群がる目高よく見える
泥けむり立てて消えたり蝌蚪の群

編集後記

今月は句会を休みましたが、会報はこれだけの便りや昭七さんの連載版・私の閑話で12頁になりました。句会を休んでも俳句生活は休めないと覚りました。

扱、台風シーズンになり、薩摩芋、里芋などは雨と日照りでどんどん伸びています。15日が十五夜、16日が例会、10月7日は駒場の近代文学館の吟行、10月尽と11月1日は法隆寺と予定が着々参ります。裏表紙の案内版を曆に書き込みどうか気を入れてお出かけ下さるようここでお願ひして後記と致します。

みち

表紙の題字
.. 加納綾女。
写真
.. 8月
27 日の白金霞